

# 大学英語教育の中のジャンル分析

—その影響力の検証—

東 條 加 寿 子

## Genre Analysis and its Contribution to the College English Education in Japan

Kazuko Tojo

### 抄 録

応用言語学の分野で様々な成果を上げているジャンル分析の手法は、高等教育における言語教育に大きな影響を与えている。本稿では、ジャンル分析を言語教育研究の広いフィールドの中で再考し、ジャンル分析が日本の大学英語教育にどのような影響や貢献をもたらしてきたかを検証する。検証の過程で、ジャンル分析の視点から ESP (English for Specific Purposes) と EAP (English for Academic Purposes) の関連性について考察し、EAP は ESP の二項対立概念ではなく、ESP に内包される一主要領域として位置づけられることを明確にする。そして、大学英語教育において EAP を実践するにあたっては、教育目的の明確化と実質化を導くジャンル分析の手法が極めて有用であることを示す。

**キーワード：**ジャンル分析、ESP、EAP、大学英語教育

(2015年9月30日受理)

### Abstract

Genre analysis has been one of the most useful as well as feasible research areas in the field of applied linguistics, and its influence on practices of language education has been significant. This article aims to reexamine genre analysis from the broader perspective of language teaching and learning, and consider its contributions to the college English education in Japan. In the process of reexamining genre analysis, the controversial distinction between ESP and EAP is discussed in search for a conceptually logical answer. From a genre theory point of view, EAP proves to be a major domain within ESP, which renders practical clues in constructing the college English curriculum in Japan.

**Keywords:** genre analysis, ESP, EAP, college English education

(Received September 30, 2015)

## 1. はじめに

ジャンル分析研究の第一人者である John Swales が著書 *Genre Analysis: English in Academic and Research Setting* (1990) を発表してから 25 年が経つ。折しも *Journal of English for Academic Purposes* の第 19 号 (2015 年 9 月発行) はジャンル分析の特集号 (25 Years of "Genre Analysis") を組んだ。この特集号には 11 篇の論文が掲載され、過去 25 年間のジャンル分析研究の成果を多角的に検証するとともに、今後の課題を考察している。応用言語学の分野で多くの研究成果を生み出しているジャンル分析は、日本においても大学英語教育の教授法として、近年、盛んに取り入れられている。理工系学術論文のライティング、薬学系・医学系の学術論文のライティング、特許ライティングといった教育実践はジャンル分析の応用事例である。中には、ジャンル分析を基軸に、大学英語教育カリキュラムを系統的に再構築した事例 (田地野、2004; 田地野、水光、2005) もある。

本稿の目的は、言語教育研究領域におけるジャンル理論研究・応用の変遷や現在の役割を改めて検証し、ジャンル分析が日本の大学英語教育にどのような影響を与えているかを考察することである。その考察過程で、大学英語教育で論じられる EAP (English for Academic Purposes) の概念を ESP (English for Specific Purposes) との関係性において捉え、教育目標の明確化を狙う。

さて、ジャンルは様々な次元で論じられる。ジャンル (genre) とは何か、ジャンル理論 (genre theory) やジャンル分析 (genre analysis) とは何か、ジャンルに基づいた言語教授法 (genre-based pedagogy) とは何か、という具合にである。ジャンル分析はジャンル理論を具現化する一手法であり、ジャンル理論を言語教育に応用したものがジャンルに基づいた言語教授法ということになる。しかし、ジャンル分析で一括りにされるテキスト分析のアプローチは研究者間で多様である。ジャンル分析の方法論を比較する先行研究がほとんどないことに着目して、後藤 (2007) は、Swales (1990)、Bhatia (1993)、Hyland (2004)、Noguchi (2004) などによるジャンル分析の代表的な手法を比較研究している。その結果として、Swales (1990) が move 分析によってテキストの展開とそれぞれの move を実現する言語的特性を観察するのに対して、Bhatia (1993) は、テキストの言語的分析のみならずジャンルの規則や慣習性を捉えようとしている、と指摘している。また Noguchi (2004) は、move 分析や言語的分析に基づいてジャンルに特有な表現形態の仮説をたて、実際の言語使用の中で応用する力を育む教授法にまで踏み込んで、自律した学習者を支援しようとしている。一方、Hyland (2004) は特にジャンル分析におけるコーパスの有用性を唱え、研究手法の確立に貢献している。各アプローチは具体的な手法やその教授法への応用について差異があるものの、いずれも、ジャンルの目的、言語使用対象、書き手と読み手の関係を意識しながら、ジャンルを表象するテキストの言語情報を分析する方法論をとっている。本稿ではジャンル分析 (genre analysis) を後藤が比較分析したような種々の分析手法を包含するジャンル理論に基づく方法論の総称として用いる。日本の大学英語教育の中でジャンル分析が応用される場合は、その大半が Swales の move 分析を応用しているが、本

稿ではジャンル分析を Swales の move 分析と同義に使用しているわけではない。

## 2. ジャンル理論研究の潮流と3学派

ジャンル理論研究 (genre research) が言語教授法 (genre-based pedagogy) として応用されるようになった背景として、ライティング教育研究があるといわれる。後藤 (2007) は、ライティング教育研究は 1960 年代中頃を機にして、センテンスレベルからディスコースレベルに推移し、それに伴ってテキストタイプを認識することに焦点があてられるようになったと述べている。そして、1970 年代に入って、書き手が従事するライティングの過程に焦点があてられるようになり、続いて、どのような状況下の何のため (誰のため) のライティングなのかを意識することが重要とされるようになって、ジャンルに基づくライティング教育研究が始まった。こういったライティング教育研究における推移は、形式重視の 1960 年代、書き手重視の 1970 年代後半、読み手重視の 1980 年代後半以降との分類 (大井, 2004) と大まかに符合している。(後藤, 2007)

ライティング教育研究の変遷を背景に、1980 年代に入ると、第一言語、第二言語教育の分野でディスコースを形式と機能の観点から分析する方法論としてジャンル分析が台頭した。ここでは、Hyon (1996) の論文に沿って、言語教育研究の領域で台頭し始めたジャンル分析とそれに基づいた言語教授法が、リーディング・ライティング教育にどのような影響を及ぼしてきたかを考察する。Hyon はまず、1990 年代までに形成されたジャンル理論研究の潮流を ESP 学派、American New Rhetoric 学派、及びオーストラリア機能言語学 (Australia systemic functional linguists) 学派の 3 つに大別し、それぞれの学術的背景やその言語教授法への応用の特徴を比較分析している。

まず、ESP 学派は、学習者がアカデミックな場面やプロフェッショナルな場面で必要とする言語能力を習得することを目的としたジャンル分析を提唱した。主たる対象者は、非母語話者の大学生や大学院生である。代表的な提唱者は Swales や Bhatia らであり、彼らはジャンルを

[Genre] is a recognizable communicative event characterized by a set of communicative purpose(s) identified and mutually understood by the members of the professional or academic community in which it regularly occurs. (Bhatia, 1993, p. 13)

と定義し、ジャンルはプロフェッショナルまたはアカデミックな共同体の構成員間で共有される固有な目的を実現するためのコミュニケーションイベントであると捉えている。

一方、New Rhetoric 学派は、レトリックやプロフェッショナルライティング研究との結びつきが強く、ジャンルを取り巻く状況やコンテキストに焦点をあて、なぜそのようなジャンルが生まれたのかといったジャンルの社会性に注目している。対象学習者は大学生や駆け出しの専門家 (novice professionals) で、これらの学習者がジャンルの社会的機能を理

解することを目標に据えている。アメリカの大学一年生が受講するライティングプログラムはその一例であるとされるが、これは、大学のアカデミックライティングには特定のレトリックがあり、その作法を習得することなくしては大学生として機能できない、即ち、大学の講義を理解し、試験を受け、レポートを書き、論文を提出して卒業することができない、との考え方を背景に、大学におけるアカデミックライティングを社会行動として捉えている。同学派は、その理念の類似性から ESP 学派にも影響力を与えている。3 番目のオーストラリア機能言語学派は、Halliday の選択体系機能言語学に依拠し、言語と社会的機能の関係性を重要視する。同理論に基づくジャンル分析は、オーストラリアの初等・中等学校のリーディングやライティング、あるいは、同国の移民を対象とした ESL 教育や職業トレーニングプログラムに応用されている。前述の 2 学派との比較において、オーストラリア機能言語学派は、オーストラリアという地域限定型であるがゆえに、その教育実践は政治的・イデオロギーの意味合いを帯びているといわれる。それは、この方式の言語教授法は、メインストリームの生徒達を規準とした学校教育への適応の一環として、マイノリティやメインストリームから外れる生徒群に一方的な言語的適応を求めるものである、と解釈できるからである。ちなみに、日本には言語教育研究を政治的・イデオロギー的視点から論ずる土壤はないと言ってよい。

ジャンル理論研究の成果を言語教授法のなかでどのように応用するかについて、3 つの学派はそれぞれ特徴的であるが、最も直接的に教授法に組み込んで実践しているのはオーストラリア機能言語学派である。オーストラリアでは初等・中等教育においてジャンルに基づく教授法が推進されてきたが、それは、初等・中等教育では教授法や教材の選定が教育行政を介して行われるため可能になったと言える。実際 1980 年代後半には、研究者たちによって Literacy and Education Research Network (LERN) が創設され、そこでレポートライティングなどについての教材開発や教授法開発が行われ、それらの成果物教材が学校で採用されたという例がある。一方、New Rhetoric 学派はやや理論的観念的で、ジャンル分析の知見を明示的に言語教授法に取り込む取組みはあまりなされなかったとされる。これとは対照的に、ESP 学派においては、Swales (1990) が行った学術論文の move 分析や Bhatia (1993) のビジネス文書の分析に代表されるように、ジャンルに対する意識を高め、テキストの構造や言語的特徴を分析するという手法が大学や大学院の言語教育のなかで明示的に教授法に組み込まれる。

### 3. ESP とジャンル分析

このように 1990 年代までに確立されたジャンルに基づく言語教授法の学派を概観してみると、日本の大学英語教育で応用されているジャンル分析は ESP 学派の流れを汲んでいることが改めて確認できる。このことを裏付けるように、深山 (2007) は、ESP 研究の変遷について論ずる中でジャンル分析の存在意義を強調している。深山は、Dudley-Evans (1998) を引用しながら、ESP 研究をレジスター分析時代 (1960 年代)、レトリック分析時

代（1970年代）、ニーズ分析時代（1980年代以降）の3時代に分類する。レジスター時代には、専門用語や語法の分析が中心に行われ、レトリック時代には、テキストレベルの分析が行われた。1970年代を境に、テキストレベルで言語を捉える重要性が認識されたことは、前述のライティング研究の動向と符合する。続いて、1980年代に入って、それぞれの専門分野で実際に必要とされる英語とはどのようなものを分析するニーズ分析の視点が盛んに取り入れられるようになり、学習者が将来的に専門家として参加するディスコース・コミュニティ（専門家集団）のニーズ分析が行われるようになった。深山は、日本の英語教育の中でESPが独立した研究分野として認知されるようになったのは1990年代に入ってからであると述べているが、この時期、日本の大学英語教育では言語学や文学に基づいた教育が主流をなしており、そのことに対して社会のニーズから乖離しているのではないかとの批判が高まりつつあった。こういった議論を背景に、一般英語（English for General Purposes）ではなく社会のニーズに合ったESP教育（English for Specific Purposes）が一躍注目を集めるようになった。折しも、1990年にSwalesのジャンル分析が登場し、日本におけるESP研究は一気に加速。「ESPの新理論」であるジャンル分析の登場を機に、日本について言えば、1990年代以降をESPの「ジャンル分析時代」と画してもよい、とさえ深山（2007）は述べている。

#### 4. ESPとEAPの関連性

ここまでの議論で、ジャンル分析はいわば「ESPの申し子」として誕生したことが分かった。しかし同時に、冒頭で引用したようにジャンル分析は*Journal of English for Academic Purposes*の領域内で論じられることが多い。学術誌の歴史からいえば、*Journal of English for Specific Purposes*の創刊は1980年、*Journal of English for Academic Purposes*の創刊は2002年である。一体、ESPとEAPはどのような関係性にあるのだろうか。

まず指摘しておきたいのは、EGP（English for General Purposes）という概念があり、ESPの対立概念としてある程度受け入れられている事実である。「特定の目的のための英語」（ESP）に対して、「一般目的のための英語」がEGPであり、いわゆる日常的なコミュニケーションのための英会話や一般教養のための英語はこのカテゴリーに入ると考えられている。その一方で、大学での英語教育となると、専門目的のための英語（ESP）に対して一般的な英語教育実践はEAPであると捉えられる。大学という高等教育機関で行う英語教育ということから漠然とacademic purposesの下で定義されるのである。しかし、以下に述べるように、それは正しいとはいえない。

二つの概念の関連性を明らかにするために、ジャンル分析に関する代表的な論文からESPとEAPについて記述している箇所をいくつか引用してみようと思う。まず、先に引用したHyon（1996）は、Swales（1990）やBhatia（1993）らのジャンル理論をまとめて以下のように述べている。

In ESP, researchers have focused on the implications of genre theory and analysis for English for academic purposes (EAP) and English for professional communication (EPC) classrooms. Scholars working in these contexts have proposed that genre-based applications can help non native speakers of English master the functions and linguistic conventions of texts that they need to read and write in their disciplines and professions. (Hyon, 1996, p. 698)

即ち、ESP の下位概念として EAP と EPC (English for Professional Communication) の二領域が位置づけられるのであり、ジャンル理論やジャンル分析は両者において有効であるとしている。これらのことを当てはめると、Swales の学術論文のジャンル分析は EAP 実践例、Bhatia (1993) のビジネスジャンル分析は、EPC 実践例といえる。

次の引用は、ジャンル分析研究の第一人者 Hyland (2002) が *Journal of English for Academic Purposes* の創刊号に寄せた論考からの引用である。ここでも、EAP が ESP に内包される一つの領域であることが述べられており、EAP は ESP 理論や ESP 教授法に由来するアカデミックという一つの特定の目的をもつ領域であることが示されている。

We need to keep in mind that EAP has emerged out of the broader field of ESP, a theoretically and pedagogically eclectic parent, but one committed to tailoring instruction to specific rather than general purposes. English for Academic Purposes refers to language research and instruction that focuses on the specific communicative needs and practices of particular groups in academic contexts. (Hyland, 2002, p. 2)

EAP has emerged from the larger field of English for *Specific* Purposes as the academic 'home' of scholars who do not research in or teach other 'SPs,' but whose focus is wholly on academic contexts. . . (Hyland, 2002, p. 3)

さらに、Flowerdew (2015) は、*Journal of English for Academic Purposes* のジャンル分析特集号の中で、Swales 自身が提唱したジャンル分析理論の目的や意図に立ち返って、次のように記述している。

The first sentence of *Genre Analysis* states that '[t]he main aim of this book is to offer an approach to the teaching of academic and research English.' (Flowerdew, 2015, p. 102)

He [Swales] furthermore clarifies that the focus is primarily on "post-secondary academic English" and that he wants to get away from a *remediation* approach to EAP. He wants to "try and build a bridge between English for Specific Purposes/Applied Discourse Analysis on the one side and L1 writing/composition on the other" and he is concerned with

academic English “in first as well as second language contexts”. (Flowerdew, 2015, p. 103)

これらの引用から、EAP は ESP の下位概念であること、そしてその限りにおいて、EAP は単なるアカデミックイングリッシュのレメディアル教育ではなく、アカデミックという特定の目的のための英語で ESP 的方法論を受け継いでいることが理論的に明確である。ジャンル分析の視点から捉えると、母語話者 (L1) と非母語話者 (L2) の違いによる教授法的配慮は二次的なものとなり、母語話者・非母語話者関わらず習得目標となるアカデミックイングリッシュの本質こそが重要であると透視できる。

## 5. EAP とジャンル分析

これまでに、EAP は ESP の主要構成要素の一つとして捉えられることがわかった。この視点を持てば、大学での英語教育実践の中に ESP 的発想や手法を取り入れることが可能になると考えられるが、以下に示すある総合研究大学の事例はその可能性を具現化している。

この取組み事例では、ESP と EAP の関係性を基軸にして大学英語教育を捉え直し、系統的な英語教育カリキュラムが再構築された。(田地野、2004；田地野・水光、2005；田地野、寺内、マスワナ、2008；田地野、2009)。田地野らは、英語は一般目的の英語 (EGP) と特定目的の英語 (ESP) に大別されるとし、特定目的の英語 (ESP) の下に、総合研究大学で取り組むべき学術目的のための英語 (EAP) と職業目的のための英語 (EOP: English for Occupational Purposes) を位置づけた。さらに、学術目的のための英語 (EAP) を一般学術目的のための英語 (EGAP: English for General Academic Purposes) と特定学術目的のための英語 (ESAP: English for Specific Academic Purposes) とに分類し、大学 1、2 年で履修される全学共通科目の英語を EGAP、後半学年で履修される学部および大学院の専門英語を ESAP と位置付けた<sup>注)</sup>。この体系化は、本稿でこれまで検証してきた EGP、ESP、および EAP の関係性と整合性があり、総合研究大学のみならず、種々の使命を担うすべての大学が自らの英語教育の目的を明確にするガイドラインとしてその有用性は計り知れない。

このカリキュラム改革で特に注目されるのは、EGAP と ESAP が学びの時間軸に沿って有機的に関わり合いながら連続性をもって配置されていることである。また、教材開発や教授法の基軸としてジャンル分析を据え、文系・理系の学術論文コーパスを構築し、文系・理系の学問領域ごとにジャンル分析が進められ、専門領域に固有な言語特性の特定と領域間の特性の比較対照が行われた。その革新的な構想とジャンル分析に基づく具体的な教材開発は他の英語教育改革を圧倒している。

## 6. おわりに

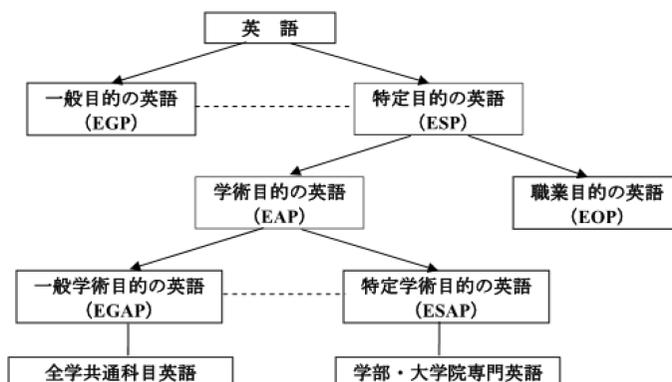
日本におけるジャンル分析の言語教育への応用は、高等教育の場で多くみられる。このことは、ジャンル分析が、学習者向けに作成された教材テキストを用いるのではなく、実

際のディスコースコミュニティで使用されている真正 (authentic) なテキストを分析対象にしていることに関連がある。学習者たちが大学生として参加している、または専門家として将来的に参加する可能性のあるディスコースコミュニティは、アカデミックコミュニティでありプロフェッショナルコミュニティである。そういった場面での言語習得は学習者にとって喫緊のニーズである。ジャンル分析手法の大学英語教育への応用は、理工系学術論文ライティングに特化したものであるという印象が強いため、従来、ESP との関連においてのみ論じられてきたとあってよい。しかし、本稿でジャンル分析を触媒として改めて ESP と EAP の関係性を検証することによって、理論的かつ実践的な新たな視座を得ることができた。即ち、EAP を ESP に内包される主要領域として捉え直すことによって、ESP の有益な理論や方法論を大学英語教育に導き入れることができる。大学英語教育のニーズは何か、取り組むべきジャンルは何か、そのジャンルの目的は何か、そのジャンルの対象は誰か、そのジャンルの言語的特徴は何か、それをどのように習得するのか。効果的なコミュニケーション遂行のためのカリキュラム構築や教材の開発がジャンル分析によって可能になる。

ジャンル分析が高等教育の中で拓くもう一つの可能性は、非母語話者向けの言語教授法からの脱却である。Swales のジャンル分析は、アカデミックな場面で主として非母語話者を教育支援する手法として提唱されたといわれるが、ジャンル分析の手法は本質的に母語話者 (L1) と非母語話者 (L2) という対象の違いによって差異化されるものではない。母語話者・非母語話者を問わず、対象ジャンルの言語的特徴やコミュニケーションルールを習得することが目的である。サイエンスの領域では共通言語が英語となって久しいが、その他の専門領域においても英語が共通言語として広く受け入れられつつある。折しも、大学教育の国際化によって、教育媒体言語としての英語の重要性が高まってきている昨今である。グローバル社会に資する英語教育の在り方を模索している日本の大学にとって、ジャンル分析は最も有望な言語教育研究手法の一つである。

## 注釈

田地野、水光（2005）は大学英語教育の目的を以下のように図解している。



\*点線は連続体を示す。

図1 大学英語教育の目的（田地野・水光、2005）

## 参考文献

- 後藤隆昭（2010）. 「英文ライティングにおけるジャンル分析方法論の比較研究」『熊本大学社会文化研究』、8：179-187.
- 金丸敏幸、マスワナ紗矢子、笹尾洋介、田地野彰（2010）. 「ムーブ分析に基づく英語論文表現データベースの開発—京都大学学術論文コーパスを用いて—」『言語処理学会第16回年次大会発表論文集』、522-525.
- 金丸敏幸、マスワナ紗矢子、笹尾洋介、田地野彰（2011）. 「英語論文表現データベースを用いた分野横断的ムーブ分析」『言語処理学会第17回年次大会発表論文集』、591-594.
- 大井京子（2004）. 「第11章 ライティング」、小池理生夫他編『第二言語習得研究の現在 これからの外国語教育への視点』大修館書店、201-218.
- 深山晶子（2007）. 「ジャンル分析に基づいたESPアプローチの実践」『時事英語学研究』No. XLVI、1-15.
- 野口ジュディ、林洋子、国吉ニルソン、東條加寿子（2008）. 「理工系日本語・英語口頭発表におけるmove表現が検索可能なオンラインコーパスの開発」『言語処理学会第14回年次大会発表論文集』、516-519.
- 田地野彰（2004）. 「日本における大学英語教育の目的と目標について—ESP研究からの示唆—」『MM News』7号、11-21.
- 田地野彰、水光雅則（2005）. 「大学英語教育への提言」、竹蓋幸生、水光雅則（編）『これからの大学英語教育』岩波書店、1-46.
- 田地野彰、寺内一、笹尾洋介、マスワナ紗矢子（2007）. 「総合研究大学における英語学術語彙リスト開発の意義—EAPカリキュラムデザインの観点から—」『京都大学高等教育研究』、13、121-132.
- 田地野彰、寺内一、金丸敏幸、マスワナ紗矢子、山田浩（2008）. 「英語学術論文執筆のための教材開発に向けて」『京都大学高等教育研究第14号』、111-121.

- 田地野彰、寺内一、マスワナ紗矢子 (2008). 「文系・理系学術論文のジャンル分析—EAP 語彙の観点から—」『JACET 全国大会要綱 47』、93-94.
- 田地野彰 (2009). 「総合研究大学における EAP カリキュラム開発—専門教育との有機的連携に向けて—」 福井希一、野口ジュディ、渡辺紀子 (編) 『ESP 的バイリンガルを目指して—大学英語教育の再定義』 大阪大学出版会、130-142.
- 照井雅子 (2013). 「ESP のジャンル・アプローチがアウトプットに及ぼす効果の検証の試み」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編』、127-139.
- Bhatia, Vijay K. (1993). *Analysing Genre: Language Use in Professional Settings*. London and New York: Longman.
- Datzman, Brien (2010). 'Genre Analysis and its Potential Application for the EFL Classroom.' 長崎外大論叢, 第 14 号, 191-200.
- Dudley-Evans, T. and St. John, M.J. (1998). *Developments in English for Specific Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Flowerdew, John (2015). 'John Swales's Approach to Pedagogy in *Genre Analysis*: a Perspective from 25 Years on', *Journal of English for Academic Purposes*, Vol. 19, 102-112.
- Hyland, Ken (2002). 'EAP: Issues and directions', *Journal of English for Academic Purposes*, Vol. 1, 1-12.
- Hyland, Ken (2004). *Genre and Second Language Writing*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
- Kunioshi, Nilson, Noguchi, Judy, Tojo, Kazuko, and Hayashi, Hiroko (2012). 'An Online Support Site for Preparation of Oral Presentations in Science and Engineering', *European Journal of Engineering Education*, Vol. 37, Issue 6, 600-608.
- Noguchi, Judy (2004). 'A Genre Analysis and Mini-Corpus Approach to Support Professional Writing by Nonnative English Speakers'. *English Corpus Studies*, 11, 101-110.
- Swales, John M. (1990). *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Tojo, Kazuko, Hayashi, Hiroko, and Noguchi, Judy (2014). 'Linguistic Dimension of Hint Expressions in Science and Engineering Research Presentations'. *JACET Selected Papers*, Vol. 1, 131-163.